

(九) 稲取の水力発電所の取水口跡

町文化財 平成元年四月指定

稲取では、明治四十四年（一九一一年）に初めて電灯がともされました。稲取の約九〇〇戸の家庭のうち、四一二戸が電気を引き、それまでの石油ランプより明るく、火事の心配もないために人々は喜んだそうです。稲取が電気を引いたのは、静岡県内では、十一番目であるともいわれています。

明治時代に入り、各地で徐々に電気が引かれるなかで、稲取では明治四十四年に医者であつた西山五郎にしやまごろうなど数名がお金を出し合い、稲取水力電気株式会社いなとりすいりよくでんきかぶしきがいしやをつくるために出し合つたお金は、当時のお金で二万五千円です。

水力発電所は、志津摩川しづまがわの上流に建てられ、ドイツのシーメンス社製の高性能の発電機が備え付けられました。水を七十二メートルの落差から落とす水力を用いて、二十八キロ

ワットの電気を発電しました。会社は、大正六年（一九一七年）に河津の会社に営業を移しましたが、水力発電は昭和十六年（一九四一年）まで続きました。

水力発電の水の取り入れ口の跡は、入谷いりやの赤松神社あかまつじんじやの裏にあります。しかし、残念ながら今は水路の石積みの大部分は崩れてしまい、一部しか残っていません。

